

[論文]

ガーデンについての一考察 (第1報)

～新しい庭園文化を発信する北海道のガーデン～

A Study on Gardens

The garden in Hokkaido disseminates new gardening culture all over Japan.

光 武 幸

目 次

1. はじめに
2. ガーデンの位置づけ
～ガーデンは庭園として扱われている!?～
3. ガーデン
 - 3.1 オープンガーデン
 - 3.2 ガーデニングと園芸
 - 3.3 ガーデンの基本知識
4. 北海道になぜガーデンが開くのか
 - 4.1 歴史的経緯
～いち早く取入れた西洋庭園～
 - 4.2 北海道にマッチするガーデンの特徴
- まとめ
- 〈参考文献〉

以上第1報

1. はじめに

2002年、北海道は「ガーデンアイランド北海道」と名乗りを上げた。ガーデンがどのようなものであるかを明確に理解していなくとも庭園であることは、多くの人には察しがつく。人によってはガーデンを竜安寺の石庭や天龍寺の池泉回遊式庭園のように、感嘆するほど美しい日本庭園をイメージするかもしれない。

北海道のガーデンを訪ねたときに耳にした言葉がある。「これって花畑を大きくしただけじゃないの」「一般的な花しか咲いてないの」「花が咲いているだけの所がガーデンなの」といった会話である。多分、ガーデンとは庭園であり、美しい日本庭園を思い浮かべて、それとはあまりにも異なる庭の様子を見て、つい口走った言葉であろう。

庭園は英語ではガーデンであり、したがって、ガーデンは庭園であるはずだが、庭園の内容はガーデンと日本庭園のような庭園とは同じでないことは先の言葉からも明らかである。

過去十数年に亘ってのガーデンの発展が、日本人の庭に対するイメージを一変させたとも言われ、特に北海道においては、広大な大地に相応しく大規模なガーデンが作庭されている。十勝千年の森のガーデン作庭にもかかわった日本の代表的なランドスケイプ・アーキテクチャーである高野¹は、2012年の北海道ガーデンショーにあたって以下のようなことを述べている。伝統ある日本庭園を持たない北海道ではあるが、いまや北海道ならではの庭を全国に発信し、北海道の庭園文化をスタートさせる時だという。もしガーデンが、花畑や花壇の代名詞であるならば、あるいはチューリップ公園や芝桜公園のような大規模に花の咲き誇るフラワーパークを指すのであれば、ガーデンが日本人の庭に対するイメージを一変させたとか、あるいは北海道が庭園文化をスタートさせ、全国に向けて発信するところなどとは決して言われないであろう。

ガーデンの定義は明確に定められてはいないが、ガーデンと言われる庭は、ではどのような姿をしていると捉えることができるのだろうか。庭園・ガーデンに関する文献調査を通して、その姿を整理し、さらに北海道のガーデンの実地調査を通して、その姿の明確化を試みるのが本稿のひとつの目的である。さらにガーデン・ツーリズムが北海道の観光のひとつのジャンルとなるためには、どのような観光マーケティング活動が必要となるのか、さらに第2報で検討する。

1 『北海道ガーデンショー お役立ち Book』p.8-9, 十勝毎日新聞社 (2012)

2. ガーデンの位置づけ

～ガーデンは庭園として扱われている!?～

1893年、日本で出版された英語による日本庭園解説書のタイトルは“Landscape Gardening in Japan”(岩波書店)であった。また、「日本庭園」を英訳するときは「ジャパニーズ・ガーデン(ズ)」が一般的に使われていることは、辞典や書物などからも知ることができる。つまり庭園はガーデンやガーデニングで表現されると考えてよさそうである。

最近ではガーデン・ガーデニングという言葉は、日本人の日常生活に浸透していることは、誰もが認めるところである。それにも拘わらず「日本庭園」を「日本ガーデン」とか「和風ガーデン」と言うのをほとんど聞かない。多分、多くの人々は「庭園」と「ガーデン」という二つの言葉の響きに何がしかのイメージの違いを感じていると思われる。庭園といえど、ガーデニングといえど、我々はイメージし、ガーデンといえど、どのような庭をイメージするのだろうか。そこで、鑑賞に堪えうるものという前提に立って、庭園とガーデンは社会の中でどう扱われているのか、その点からみていくことにする。

文化庁文化財部の「近代の庭園・公園等に関する調査研究報告書」(2012年)には、おおむね国または地方公共団体による名勝等の候補となり得る庭園として927件が選定されている。そのうち芸術上または鑑賞上の価値が高く、学術上の価値の高いものを名勝に指定することが行われた。芸術上または鑑賞上の価値ある庭園とは、下記の(1)及び(2)の特質を有することが必要であることが示されている。

- (1) 現状の地形、地割、植物、水、石組、構造物等の諸要素が組み合わさり、独特の景観構成を示していること。
 - (2) 当該地方の風土的特色により、独特の景観を示していること。
- の2点をあげる。

さらにこのような価値を有する庭園を所有者又は付随する建物の性質によって10に区分する。具体的には「地方の地主・資産家等の庭園」「芸術家・学者等の庭園」「皇室の庭園」「旧藩主の庭園」「その他の個人の庭園」「寺社の庭園」「公共施設・公開施設・学校・会社・工場等の庭園」「ホテル・料亭等の庭園」「花園等の庭園」「その他」である。また文化財としての価値に鑑みて保存及び活用のための措置が特に必要とされるものを登録記念物(名勝地関係)とし

て登録し、それぞれ保護の措置が講じられている。現在のところ、29件の庭園が名勝として指定され、34件の庭園が記念物として登録されている。

十区分された評価対象庭園は「近代の」ということもあり、京都や奈良などに多い近世以前に造園された寺院や武家の庭園は含まれていないが、それでも日本庭園をイメージさせるものは多い。その中で「公共施設・公開施設・学校・会社・工場等の庭園」「花園等の庭園」は必ずしもすべて日本庭園をイメージさせるものではなく、また、明治から昭和初期にかけて造られた旧地主や資産家等の西洋建築の邸宅・別荘の庭には日本庭園よりも西洋庭園が多い。たとえば大正時代に古河財閥の当主の邸宅として建設された洋館には、ジョサイア・コンドル設計の西洋庭園(イタリア式とフランス式の折衷庭園)が造られ、2006年には大正時代の庭園の様式を残すものとして名勝に指定された。これは都内の西洋庭園として真っ先に思い浮かべられる庭園であり、現在旧古河庭園(都立庭園)として一般公開されている。

報告書には国および地方公共団体によって選定された927箇所のうちの681箇所の庭園が列挙されている^(注1)が、その中にガーデンと名のつく庭園は1箇所(日光市にある五百城文哉ロックガーデン)のみである。ガーデンという名称はついていないが、名称のみから西洋庭園だと認識できるのは宇都宮大学のフランス式庭園と相模女子大学のフランス庭園および奈良・霊山寺バラ庭園の三箇所のみである。名称のみでは西洋庭園だと判別できなくても、旧古河庭園のように、西洋庭園は少なからず存在していることは言うまでもない。

この報告書の中には公園部門が設けられ、都市公園の一つとして新宿御苑が挙げられている。御苑の中にはフランス式整形庭園とイギリス風景式庭園という二つの西洋庭園が作庭されているが、これらは庭園としてのカテゴリーの中に位置付けられているのではなく、公園の一部としての位置づけである。

報告書から推察すると、庭園の概念には日本庭園も西洋庭園もガーデンも含まれることになる。日本庭園に関しては、従来から様々な視点で研究され、また多くの書物も刊行されている。それらによると、日本庭園は「実際にある風景の縮景的表現」であり、そのひとつである枯山水庭園は「自然の本質を石の組み合わせと配置による空間造形として示そうとした」もの²であり、そこには植物である花は庭園の主要な要素となっていない。また、美しい自然の風景

2 岡田憲久著『日本の庭ことはじめ』p.232, TOTO 出版(2008)

を庭として再現するために、必要ならば地域を越えて遠くからでも庭園の材料を集めてきて造園するのが一般的である。一方、報告書に取り上げられているフランス庭園やロックガーデン（一般的には高山植物のような耐寒性植物が植栽されている庭園）は、日本庭園とはかなり異なった庭園風景をしている。大正 12 年から教員たちによって作庭され始め、学生たちの協力を得て大正 15 年に完成した宇都宮高等農林学校（現・宇都宮大学農学部）のフランス式庭園（写真 1）を展望台から一望すると、整形庭園の特徴である左右対称・シンメトリックな庭園の枠組みの中に、赤やピンク色などの花が咲き、日本庭園とは異なる美しい風景をしていることが見てとれる。前述した新宿御苑のフランス式整形庭園（写真 2）をみても、基本は幾何学模様で、左右 2 列ずつのプラタナスの並木の間に作られたシンメトリックな庭園の枠組みの中にバラ等の花々が咲きみだれている。フランス庭園は「花畑を大きくしただけじゃないの」というガーデン訪問者のガーデンを称して言った言葉とは一致しない庭園であることは写真 1 及び 2 から明らかである。



写真 1 宇都宮大学 フランス式庭園



写真 2 新宿御苑 フランス式整形庭園

そこで、近代の庭園を扱った報告書から離れて、インターネットでガーデンを検索してみると日本各地に存在していることが分かる。規模の大きいものから小さいものまで様々であろうし、単に花壇を集めたものをガーデンと言っているものまであるかもしれないが、少なくとも近代とは異なり、現代は多数のガーデンが存在していることは推察できる。また、ガーデンは独立した名称で存在するだけでなく、新宿御苑のような公園の中にガーデンが作庭されているような場合も多い。2000 年に国際園芸・造園博「淡路花博ジャパンフローラ 2000」が行われた淡路島には、当時作庭されたガーデンが淡路夢舞台および淡路島国営明石海峡公園の中に存在している。2004 年に静岡国際園芸博覧会^(註2)が浜松で開催されたときに作庭されたガーデンは浜名湖ガーデンパーク（公園）の中にあり、また札幌百合が原公園の中にもヒースガーデンやロックガーデン、ボーダーガーデンなどいくつもガーデンが存在している。さらに植物園の一構成要素としてもガーデンは存在する。たとえば福岡市立植物園にはローズガーデン（写真 3）がひと際訪問者の目を引くように存在し、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園（北大植物園）には、北の大地に相応しい日本の代表的なロックガーデンのひとつが存在する。このように全国各地に〇〇ガーデンという名の庭園や公園、植物園にも、規模の大小に関わらず少なからずガーデンが存在している。

北海道では、公園や植物園の一部としてガーデンがあるだけでなく「ガーデンアイランド北海道」「ガーデン街道」と言うフレーズさえも存在するガーデンの存在感が強いところである。フランス庭園やイギリス風景式庭園とも異なる「花畑を大きくしただけじゃないの」と称されたガーデンとは、では一体どのような庭なのだろうか。そこで、ガーデニング、オープンガーデンを通してガーデンのイメー



写真 3 福岡市立植物園 ローズガーデン

ジ作りから始めたい。

3. ガーデン

3.1 オープンガーデン

1990年代にガーデニング・ブームが起こった。流行になったものは必ず廃れる運命にあるというが、身近な環境を見る限り、ガーデニングはブームを経て廃れてしまったのではなく、生活におけるひとつの楽しみとして定着し、さらにオープンガーデンというひとつの余暇活動に結び付いてきたと筆者は捉えている。

オープンガーデンとは、端的にいうと住宅の庭を一般に公開するものである。住人の手によって庭に花が咲き誇り、所によっては石が置かれ、池が造られ維持管理されて美しい庭をつくりだし、それを誰にでも公開し、鑑賞して楽しんでもらうところと位置付けられる。1927年に始まるイングランド・ウェールズのナショナル・ガーデン・スキーム³による個人庭園の公開に端を発するオープンガーデンは、歴史的経緯の研究だけではなく、相田⁴や小池⁵、朴⁶、野中⁷らによって2000年代はじめから、その特徴や取り組みの様子、鑑賞者の行動特性などたくさんの研究報告がなされている。ナショナル・ガーデン・スキームは医療関係への寄付金を集めることを目的としてオープンガーデンを開催してきた経緯があるが、時代とともにその目的も多様化し⁸、わが国においてもオープンガーデンの取り組みを通して地

域活動・地域活性化に生かされるようになってきた。

北海道では恵庭市の住宅街のオープンガーデンは非常に有名であり、道民にガーデンとはどのような庭なのかを端的に示す役割を担ってきたと思われる。オープンガーデンという言葉がまだ一般化していなかった頃、恵庭市恵み野地区(1980年代に開発されたニュータウン)に花が美しく咲く住宅の庭が徐々に増え始め、わずか十数年後の1995年には第5回「全国花のまちづくりコンクール」団体部門において、恵み野花づくり愛好会が「花のまちづくり最優秀賞 建設大臣賞」を受賞するに至った。それがマスコミによって紹介され、一躍多くの道民に知られることになる。家庭の庭が見ず知らずの方に解放され、美しい花で満ち溢れる庭を楽しむために隣近所だけではなく、数キロ先、数十キロ先から庭に関心ある人たちが訪れることなど、従来では考えられない現象がおこった。今でこそ、全国各地にオープンガーデンが存在するが、花の町恵庭の出発は全国に先駆ける取組であった。

恵庭市のオープンガーデンが、恵庭花のまちづくり推進会議から「ようこそ恵みの庭へ 恵み野花マップ2014」によって住宅の素敵な庭が観光情報として提供されている。10か所のオープンガーデンに加えて、32か所の住宅の庭が紹介されている(写真4)。

オープンガーデンを通してみえてきたことは、ガーデンは花が咲き誇る庭であり、それは植物が自然の如くに生きている美しい姿をあくまでも個々人



写真4 恵庭市恵み野地区のオープンガーデン

3 相田明・鈴木誠・進士五十八「英国ナショナル・ガーデン・スキームによるオープンガーデンの発祥と活動」日本造園学会誌：ランドスケープ研究 63(5), 393 (2002)

4 相田明・進士五十八「先駆的事例を通じたわが国におけるオープンガーデンの意義」東京農大農学集報 46(3), 154-165 (2001)

5 小池拓矢「大都市近郊におけるオープンガーデンの特徴とその機能」地理空間 6-1, 35-46 (2013)

6 朴恵恩・野中勝利「オープンガーデン活動の実態からみた展開と課題」日本都市計画学会都市計画報告集 No.7, 31-36 (2008)

7 野中勝利「日常的公開のオープンガーデンにおける鑑賞者の行動特性」都市計画論文集 No.40-3, 847-852 (2005)

8 相田他 前掲書 p.396 (2002)

の有する表現の仕方・デザインによって、何年もかけて作り上げた自然と人とのコミュニケーションの場であり、美しい自然の風景を庭の中に再現する縮景の庭ではないことである。

3.2 ガーデニングと園芸

オープンガーデンは住宅の庭であることが多く、住民がその庭づくりをするのが一般的である。日本ではその庭づくりをガーデニングと呼び、ホームセンターなどがガーデニングという言葉を経営に使い流布してきたきらいもある。しかし、札幌商工会議所が発行する『北国のガーデニング』⁹には、ガーデニングをどう定義づけるのかも、また日本語で正確に表現することも結構面倒なことだという。造園の専門家である宮脇¹⁰も同様にガーデニングの概念が曖昧なままに人々に伝播していることが、いささか気になることだという。それにもかかわらずガーデニングは多くの人に知られ、消費の場においても重要な位置を占めるようになった。

日本においてガーデニングが注目されるようになったのは、1980 年代以降である。1990 年の大阪花博がガーデニングブーム到来のけん引役を担い、1997 年には日本語流行語大賞に選ばれるほどガーデニングはブームとなった。そして 2000 年には淡路島で「国際園芸・造園博ジャパンフローラ 2000」（通称：淡路花博）が開催され^(注2)、入場者数は約 700 万人に上った。下村ら¹¹は、花博は日本人にとってガーデニングについて学ぶ機会・場として存在したのではなかろうかという。それはガーデニングの要素である花を知り、育て、愛でることを勉強する機会であったと理解することもできるという。高田¹²もまた同様にガーデニングの極意は植物の理解者になることであり、ガーデニングの核心に迫ることは、植物の育て方などのハウツウを知ることではないという。日常的に使われるガーデニングという言葉ではあるが、正確に把握することはなかなか難しい。

造園用語辞典¹³ではガーデニングとは「庭づくり、庭仕事、庭をつくり育てる行為、また庭づくりや庭での生活全般を楽しむことを表現する用語」と説明

される。また庭園・植栽用語辞典¹⁴には「広く園芸を指す。公園、家庭で草花を育成したり楽しんだりすることを総称してガーデニングと呼ぶが、草花を中心とした庭造りの意味にも使われている」という。ではガーデニングとは庭づくり、庭仕事、園芸と同じなのだろうか。高橋¹⁵は「従来の『園芸』『庭仕事』は、植物の栽培を楽しむものであったのに対し、『ガーデニング』は、植物を栽培するだけでなくデザインして、生活空間の向上に利用していこうとするものであると解釈される」と述べる。つまり、江戸時代に路地や住宅の窓辺に朝顔を栽培したりすることが流行したが、それがまさに園芸であり、オープンガーデンの状況も含めて考えるとガーデニングはそれよりももっと広く生活空間を向上させ、楽しむことまでも包含する概念ということができよう。

そこで日本の園芸の代表である盆栽を通して、園芸とガーデニングは必ずしも同じ概念ではないと捉えられることについてみることにしたい。盆栽は木や草花を鉢の中に植え込んで鉢の中に山水の景色を表現するもの、つまり彩花盆栽であることから、自然の素晴らしい要素を取込んで模倣したものと見ることができる。盆栽家の山田¹⁶は、盆栽は「植物を身近に置き、育て、愛でるもの」「飾って愛でるもの」「清浄でシンプルで精神性の高い美を備えているもの」「盆栽のある暮らしは心をゼロにする」という特徴を述べる。盆栽の特徴を通して園芸をみると、ガーデニングと園芸は、特に人間の内面に与える効果などについては同様な特徴を持っていると思われるが、ガーデニングには彩花盆栽の概念が薄いように捉えることが可能ではないだろうか。白幡¹⁷はガーデニングと園芸は同じではなく、自然を材料として自己を表現するものがガーデニングであるという。つまり、ガーデニングはガーデナーの心の中にある風景をガーデンデザインを通して表現するが、そのとき自然を模倣した縮景として花々や樹木が植栽されるのではなく、花の理解者としてガーデナーは行動すると思われるのである。そして作庭されるのがガーデンである。

9 札幌商工会議所編『北国のガーデニング 北国のガーデニング知識検定公式テキスト』p.8 (2009)

10 宮脇義孝「造園工事とガーデニング」日本造園学会誌：ランドスケープ研究 65(1), 37-40 (2001)

11 下村孝・梅森雄治「イングリッシュガーデンから『ジャパニーズガーデン』へ」日本造園学会誌：ランドスケープ研究 65(1), 1-2 (2001)

12 高田昇著『ライフスタイルガーデン』p.12, 創元社 (2013)

13 東京農業大学造園学科編『造園用語辞典第三版』彰国社 (2011)

14 吉河功 (監)・日本庭園研究会編『庭園・植栽用語辞典』井上書院 (2000)

15 高橋ちぐさ・下村孝「ガーデニングブームの実態と背景」日本造園学会誌：ランドスケープ研究 65(1), 28 (2001)

16 山田香織著『盆栽が教えてくれる人生の答え』p.45, p.11, p.10, p.20, 講談社 (2013)

17 白幡洋三郎「ガーデニングと園芸」日本造園学会誌：ランドスケープ研究 65(1), 19-20 (2001)

3.3 ガーデンの基本知識

中根は『名庭のみかた』の中で「物を鑑賞するには根本的に知らねばならない知識があるのですから、庭を見る上に必要とする要点を予備知識としてもっていただければ、容易に庭の鑑賞ができ興味も一層深まる」¹⁸と言う。ガーデンは庭であるけれども、日本人が庭として見慣れてきた日本庭園とは、作庭の趣旨も庭の構成要素もかなり異なっている。そこで、ガーデンを楽しむ上において、知っていることが望ましい基本知識を以下の3点について考えていきたい。

- (1) ガーデンの概念の由来
- (2) ガーデンの基本要素
- (3) ガーデンの特徴

(1) ガーデンの概念の由来

19世紀後半になって日本に西洋庭園が造られるようになって、それまでに作庭された寺院や藩主・武家屋敷などの庭園は日本庭園と位置付けられるようになった。平安時代を代表する寝殿造庭園、鎌倉時代は書院造庭園、室町時代を代表する浄土式庭園、江戸時代は大名庭園など時代を映す庭園が造られてきた¹⁹。そしてこれらの日本の庭園の多くは自然の風景を模倣した縮景²⁰を庭園の中に再現することであった。たとえば江戸時代の大名庭園で盛んに造園されたのが池泉回遊式庭園であり、庭園の池は海洋の景色を表現し、著名な山を模写した築山を造って深山幽谷の風景や雰囲気を出すことを行ってきた。桂離宮庭園の池中に細長い出島が造られ、松が植林されているのは天の橋立を模写したといわれている²¹。

そのように考えると、ガーデンは日本庭園の概念の延長線上にはない。オープンガーデンから分かるように、基本的に花が咲き誇ることが主要な要素だとするガーデンは、日本ではなく英国の庭園の概念を取り入れたものである。現在の日本の、特に北海道のガーデンを考える上において、基本知識となるのは英国の庭園である。英国の庭園のうちでも、19

世紀末から20世紀にイギリスで独自に発展した現代庭園がイングリッシュ・ガーデンと呼ばれ、それが基本概念だと捉えることができる。そこで、イングリッシュ・ガーデンが誕生する経緯を簡単に見ながら、イングリッシュ・ガーデンの特徴が北海道のガーデンに取込まれている様子を見ることにしたい。

(1.1) イギリス風景式庭園

イギリス発祥のイングリッシュ・ガーデンは19世紀後半に作庭され始めるが、それ以前にはイタリアやフランス、オランダなどヨーロッパの大陸側で発展してきたガーデン様式を英国でも取り入れ作庭されていた。たとえばルイ14世時代に造園されたベルサイユ宮殿の整形庭園(平面幾何学式庭園)は、強大な権力を象徴するように広大な土地に左右対称の幾何学模様で構成されるフランス式庭園の代表であるが、イギリスはフランスと権力構造や国土の地形も異なることから、ベルサイユ宮殿の整形庭園ほどのものは造園されなかった。とはいえ、ハンプトンコートに見られるようにデザインの要素は取り入れられ作庭されてもいる²²。その後18世紀中ごろ、整形庭園を批判する形で登場したのが、ウィリアム・ケントが主導するイギリス風景式庭園である。日本庭園は自然を手本とし、自然の最も美しい姿のミニチュアを造形することにあるが、イギリス風景式庭園は大地の特性を見極め、自然と人との合作によって広々とした理想的な自然空間を作り出すことであった²³。風景式庭園の特徴²⁴のひとつは、広くてなだらかに起伏する芝生と、ところどころに点在する樹木、人工的な川や湖などがあり、それらが外部の土地と一体化して、庭園そのものが自然であるかのように作庭されることである。新宿御苑に作庭されているイギリス風景式庭園(写真5)にその特徴を見ることができる。しかし、単調さは否めない。それ故、ケント亡き後、風景式庭園も批判されるようになり、自然は直線やシンメトリーで構成されてはいないことから、庭園の苑路や池の周りには極力曲線が用いられ、また絵画や旅行でイギリス人の脳裏に刻まれた絵のように美しい(ピクチャレスク)ヨー

18 中根金作著『名庭のみかた』はじめに、保育社(1977)

19 飛田範夫「古代・中世の庭園と園芸との関係」日本造園学会誌：ランドスケープ研究 65(1), 7-12 (2001)

20 庭園関係者においては、縮景とは国内外の名所・名勝を模倣して再現した手法を指す。

重森千青著『日本の10大庭園』p.265, 祥伝社新書(2013)

21 中根 前掲書 p.102-103 (1977)

22 ハンプトンコートの庭には、アヒルの足型と言われる軸線や左右対称の模様も見られる。

宮前保子著『“イングリッシュガーデン”の源流 ミス・ジーキルの花の庭』p.23, 学芸出版社(2001)

23 横明美著『旅するイングリッシュガーデン』p.99, 八坂書房(2012)

24 岩井茂昭「イギリス風景式庭園とピクチャレスク概念」近畿大学教養・外国語教育センター紀要, 外国語編, 3(2), 33-46 (2013)



写真 5 新宿御苑 イギリス風景式庭園

ロップ大陸側の風景を庭園の中に具現化されることになった。そこにはギリシャやイタリアの古典的意匠の橋や建物などの構造物が配置された。しかし、理想化された田園風景は美しいとはいえ、現実のイギリスの風景ではなかった。さらにこの時代、外国産植物が大量に輸入され品種改良されて植栽されるようになり、ますますイギリスの風景とは異なる庭園となっていった。

(1.2) コテッジガーデンと現代庭園 イングリッシュ・ガーデン

19 世紀後半、イギリス風景式庭園批判とイギリスの社会構造変化によって現代庭園であるイングリッシュ・ガーデンが誕生することになる。産業革命以降、経済的に豊かな都市生活者、つまりブルジョアジーが誕生し、貴族やジェントリー（ジェントルマン階級）に代わって経済社会の主導権を握ようになる。ジェントルマン階級は田舎に風景式庭園を作庭できるほどの広い土地を所有していたが、ブルジョアジーは彼らに比べて広い土地所有者とはなれなかった。ブルジョアジーにおいては、田舎に邸宅や別荘を建てるのが流行するが、ここに簡素で自然なカンントリーライフを享受する庭として、現代に続くコテッジガーデンが作庭された。コテッジガーデンはもともと田舎の民家の小庭園で、自生種の多年草などが植栽されていた庭を指すが、ブルジョアジーの別荘ないし邸宅のガーデンとして作庭されるようになって、庭園が実用的な庭の部分、つまり野菜を栽培したり（ポタジェ）、はちみつを採取するためのビーガーデンなどがある部分と草花や果樹から構成される庭の部分を持つようになった。これが新しい形のコテッジガーデンであり、この延長線上に

イングリッシュ・ガーデンが存在する。

整形庭園や風景式庭園の批判があるなかで、現実の自然の風景・自然の姿の再現（自然の模倣ではない）を目指すコテッジガーデンは、それ故、イギリスの風土・自然を明確に表現するものと捉えられる。宮前²⁵はこのコテッジガーデンの意義を「現代まで続く花卉を中心とした小庭園の様式の基礎を築いた点」を挙げる。イギリスの民家では伝統的に地域の自生種の宿根草や改良種が植栽され、四季を通じてガーデンを彩っていたが、この伝統をコテッジガーデンが生かし続けてきたことである。それをヒントにしてイングリッシュ・ガーデンでは、たとえばローズガーデン、ハーブガーデン、ホワイトガーデンのような小テーマごとの庭園が造られる基礎となったことである。宮前はコテッジガーデンのもう一つの意義として、イギリス風景式庭園で崩壊してしまった自生種の回復の場所になったことを指摘する。帝国主義時代、海外から多様な植物を持ち込んで植栽し、イギリス固有の植物を崩壊させてしまったことの反省に立ち、Right Plant, Right Place、つまり庭の環境に適した植物選びであり²⁶、地域は地域の植物を大切にすることの重要性に気づき、自生種の育成を行ってきたことである。

以上のように見ていくと、一般にガーデンは広い庭ではなく、その土地・環境に適した花や木が自然の中にある如くに咲くことを中心にデザインされた庭であり、そこには人間が植物とコミュニケーションをとりながら、個々の植物の特徴を生かし植物同士の協調を大切にした調和のとれた庭であり、またポタジェといった野菜などを栽培する部分を持つことだと言えよう。北海道のガーデンを巡ると、花々が自然の中にあるように咲き乱れ、イングリッシュ・ガーデンの考えが息づいているのを見ることができる。ただ大きく異なる点は北海道のガーデンの多くが、広い面積を有することであり、それは特質に値する（第 2 報で検討）。以下、イングリッシュ・ガーデンの基本要素について検討する。

(2) ガーデンの基本要素

イングリッシュ・ガーデンの基本要素は「不規則性」「多様性」というキーワードで捉えられる²⁷。

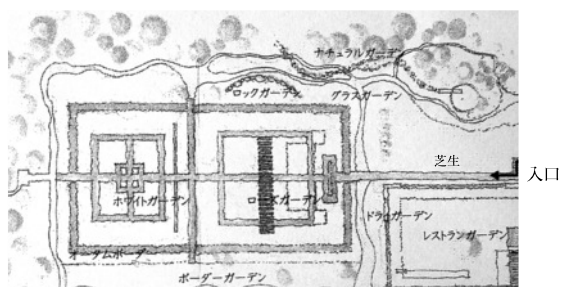
ガーデンは自然風であることが基本である。それは自然を模倣するというのではない。花や木が自

25 宮前保子「ガートルード・ジーキルの自然観とコテッジガーデン」日本造園学会誌：ランドスケープ研究, 63(5), 403-408 (2000)

26 新谷みどり著『十勝千年の森の庭仕事』p.31, 主婦の友社 (2014)

27 安藤聡著『英国庭園を読む ― 庭園をめぐる文学と文化史』p.265, 溪流社 (2011)

自然界には見られないような規則正しく同じ高さに綺麗に刈り込まれ整然と並んでいたりするのではなく、植物が自然の中で自由に育っている、自然の如く振る舞っている不規則性を基本とするものである。従来、庭園における規則性、不規則性は人工と自然という対比で語られることが多かった。日本庭園や整形庭園は、人工的にある規則性をもって造られる庭であり、一方、多くの植物が自由に繁茂するガーデンは、自然風であるがゆえに不規則性であると位置づけられる。しかし、ただそれだけではなく、ガーデンは規則性も内包した不規則性が支配する庭と捉えることができる。それはガーデン内に石垣や生垣、レンガ塀等で囲んだいくつかのテーマをもった小空間（規則性）、つまり空間コンパートメント化²⁸を図り、その小空間のテーマに沿って、植物が自然界に自生しているかのように繁茂する、整形性と不規則性の共存の世界である。したがって、規則的な仕切りを設けるフォーマルな枠組みの中で、たとえばローズガーデンという小テーマの小空間を設けて、多種類のバラが数千株も植栽され、隣の小空間ではホワイト系の宿根草が植えられるというように、多様な植物が多様な小空間の中で自然界にある如く育ち、小空間を越えて多様性のある世界が広がるのがガーデンである。小空間の設計と色彩が異なるために雰囲気やイメージをがらりと変えることができ、これが見る人に次は何だろうとワクワク感を与え、また優雅さや野生的な感じ等を与える効果を持つ。図1は苫小牧市にあるイコロの森のガーデンマップの例である。芝生を通り過ぎて最初の小空間がローズガーデンである。蔓バラで覆われた石垣を挟んで隣の小空間はホワイトガーデン、つまりグレースの異なる白色を中心とした花々が植栽されている小ガーデン、その外側には石垣を挟んでボーダーガーデンが苑路に沿って長く作られている、というように小テーマのガーデンを越えて、ひとつの



出所：イコロの森のガーデンマップ

図1 ガーデンの一例

大きなまとまりのガーデンが形作られ、ガーデンに深みや立体感をもたらしているのである。したがって、たとえばチューリップ公園のように開花時期が終わると終わってしまうという所ではなく、数百種類、数千株の多様な花々が、開花期間に従って自由を謳歌し不規則に咲き誇る場所である。

次に「調和」という言葉から、イングリッシュ・ガーデンの基本要素を考える。公園の花壇を思い浮かべると、春になると温室で育てられた花々が一斉に植栽され、目に鮮やかな毛氈花壇（カーペット花壇）が登場する。そして開花期間が終わると新しい花々に植え替えられ、公園の花壇は再び色鮮やかとなる。目に鮮やかに映るためには対照的な色彩の花々を植栽することが一般的に行われる。写真6は札幌大通公園の毛氈花壇である。たとえば赤：ゼラニウム、サルビア、青：ルベリア、トレニア、黄：キリンソウ、マリーゴールド、白：バーベナ、ニチニチソウ等が植栽されてコントラストがはっきりとし、しかも花の高さもほぼ同じようであり、人々の目に留まりやすい鮮やかな花壇である。しかし、ガーデンはこのような色合いを持つ花壇ではないのである。

ガーデンは対照的な色づかいではなく、調和が支配する植栽である。イングリッシュ・ガーデンの立役者であるガートルード・ジーキル (Gertrude Jekyll 1843-1932) は、植栽の重要なスキルである色彩計画 (Colour Scheme) を考え出した。カラースキームは色彩の枠組みを表す言葉であるが、日本では一般に色彩計画と訳される。隣り合う花の色を効果的に見せるために、どのような色同士を隣り合わせに置くとよいのか、補色をどう生かすのか、さらに葉の色やテクスチャー（植物のキメ）を考慮し、植物



写真6 毛氈花壇（札幌大通公園）

28 赤川裕著『英国ガーデン物語——庭園のエコロジー』p.57, 研究社出版（1997）

の高さや形を生かすように組み合わせられ、また成長の時期の違いを上手に取り込むことによってガーデンにいつも花々が繁茂するように工夫がなされるスキルである²⁹。ガーデンの主人公である花々は宿根草、多年草が多く用いられ、また地域に適した郷土種・自生種の植物が使われ、色づかいに配慮されて植栽され(カラスキームの立案)、混色による魅力の引出し、立体的で季節的なデザインなどが植栽において重要視されている³⁰。このスキルによってボーダーガーデン^(註3)は、平面ボーダーよりも少し傾斜した傾斜型ボーダーが取り入れられるようになり、より一層発展することになった。ジーキルが発案した色彩計画は様々な要素が組み合わせられたガーデンデザインの基礎的な設計図をなすものであり、ジーキルのガーデン手法は「植物を美しい絵を描くように用いる」³¹植物のアートである。「自分の庭が美しい絵になるように植物を用いること、それこそが庭に対して私たちが負っている義務であり、庭と自分自身の向上のために私たちがなすべき勤めではないか」³²という。

ジーキルの色彩理論に影響を与えたのはイギリスの偉大な画家であるターナーの絵ではないかとビスグローブ³³は言う。絵の好きな方ならターナーの絵に見られる調和のとれた色の使い方、幅広いグラデーションを脳裏に浮かべると思う。ジーキルもまさにこのような色づかいを植栽で行ったのである。ジーキルのガーデナーとしての最高の能力は、調和の価値および色彩の対比の重要性を認識する能力にあったのである³⁴。

(3) ガーデンの特質

北海道のガーデンと言えば、必ずや紹介される紫竹ガーデンの経営者・紫竹昭葉氏は「ガーデンは人間の思い通りに造れない庭園である。」³⁵という。それはたとえ庭園デザインを最初にきちんとしても、庭園の主人公は花々であり、したがって基本のデザインの上に植物の生き方・力によって作られていくものである。ガーデンは生き物の集合体であり、時

とともに常に変わり続け、成長する庭であり、完成形はないのである³⁶。赤川³⁷も植物を始めとする生命体が時間の経過に身をゆだねて変化していく時間芸術であると述べる。

この言葉の中には、ガーデンの主役である花々(宿根草)が自然の摂理に従い、植物同士が協調して生きていくのだということを読み取ることができる。花々は必ずしも年々成長して大きくなるわけではなく、また必ずしも植栽されたところに毎年毎年きちんと花を咲かせるわけではなく、他の植物との関係で場所を移して花を咲かせることもあり、また冬には地上部を枯らして栄養を蓄積しながら開花を待つ。その姿には、1年草では見ることでできない植物の自然界での生き方が如実に示され、他の動植物との協調なくして、そして自分自身の蓄積なくして自己の存在がないことをガーデンは図らずも示しているといえよう。それは人間に対して生き方の手本を示しているとも受け取れよう。

十勝千年の森(表1参照)のプロジェクトに関わった新谷³⁸は、スウェーデンの庭造りの修業経験から、様々な国の庭園文化に影響を受けながらも定まった様式を持たず、雄大な自然を敬い、その中にある人々の暮らしを率直に表しているのが、スウェーデンのガーデンだという。ガーデンには日本庭園や西洋庭園のような様式が存在しない分、自然の摂理がしっかりと働く自然環境の縮図であり、その中に雄大な自然を敬う気持ちが込められていることもガーデンのひとつの要素であると考えられる。日高山脈の麓に作庭された十勝千年の森のアースガーデン^(註4)(写真7)は、日高山脈と一体化して存在し、自然環境の縮図であると感じるであろう。そして、ガーデンを取り巻く自然環境を生かして造られたフォレストガーデンや多くの宿根草から構成されるメドウガーデン(野の花の庭)に、北海道のガーデンの特徴が示されている。

大雪森のガーデン(表1参照)についても同様の姿を見ることができる。大雪山系を眼の前に望む標高350mの上川町の旭ヶ丘に作庭された森のガー

29 ガートルード・ジーキル著・土谷昌子訳『Colour Schemes for the Flower Garden ジーキルの美しい庭——花の庭の色彩計画』p.206, 平凡社(2008)

30 農大 前掲書 p.190 (2011)

31 ジーキル・土谷 前掲書 p.206 (2008)

32 ジーキル・土谷 前掲書 p.14 (2008)

33 ジーキル・土谷 前掲書 p.6 (2008)

34 ジーキル・土谷 前掲書 p.6 (2008)

35 紫竹昭葉著『咲きたい花はかならず咲く』p.28, p.78, KADOKAWA (2015)

36 高田 前掲書 p.149 (2013)

37 赤川裕「わが国におけるガーデニング研究の一側面」日本造園学会誌：ランドスケープ研究, 65(1), 3-6 (2001)

38 新谷 前掲書 p.4 (2014)

表1 北海道の主要なガーデン

地域	ガーデン名称	所在地	一般公開年
十勝圏	紫竹ガーデン	帯広市美栄町	1992 年
	十勝ヒルズ	幕別町	2004 年
	十勝千年の森	清水町	2008 年
	真鍋庭園	帯広市稲田町	1966 年 (創業：1931 年)
	六花の森	中札内村	2007 年
旭川・上川	上野ファーム	旭川市永山町	2001 年
	大雪森のガーデン	上川町	2013 年
	北彩都ガーデン	旭川市	pre-open 2013, 2015 完成
富良野	風のガーデン	富良野市	2007 年
道央圏	銀河庭園	恵庭市	2006 年
	イコロの森	苫小牧市	2008 年

デンは、ガーデンと山々が作り出す光景にカムイミンタラ（神々の遊ぶ庭）とはこのような庭を言うのではないかと得心させる力を持つガーデンである（写真8）。

自然と距離を置かざるを得ない環境の下で生活を



写真7 十勝千年の森・アースガーデン



手前のオブジェ：牧野研造作「ドレスガーデンカンテ」
(2015 年ガーデンショー)

写真8 大雪森のガーデン

している現代人にとって、ガーデンは人々と自然との関係を回復させるだけではなく、人間性をも回復させる場所とすることができるのではないだろうか。日本庭園のような庭園の芸術美を鑑賞し・共鳴し、感動するところというよりは、普段の生活にある自分の心と共鳴するところだと捉えることができる。したがって元気をもらったり、気分が爽やかになったり、喜び、なぐさめ、楽しみ、リフレッシュを与えてくれる場である。それ故に、昨今はガーデン療法として注目されてもいるのである。

4. 北海道になぜガーデンが花開くのか

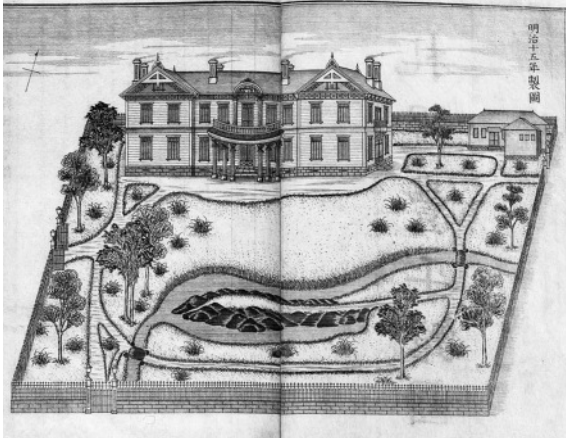
4.1 歴史的経緯

～いち早く取入れた西洋庭園～

北海道は明治時代にすでに道外に先駆けて西洋庭園が造られていた。日比谷公園に西洋庭園が造られたのは1903年(明36)であり、またビジネスで成功した資産家たちが邸宅を造り、それらに付随する形で西洋庭園が造られたのもこの時代である。しかし、北海道ではこれよりも早い1881年(明治14)に竣工した豊平館の前庭に西洋庭園がつくられている。

明治時代に入って北海道の開拓は本格化するが、北海道のまちづくりにおける建築物は道外の都市のまちづくりの発展過程を経ずして、直接アメリカ人を中心とした専門家の指導の下に西洋式建築物が建てられていく。アメリカコロニアル様式の白亜の西洋建築物である豊平館には、ルイス・ペーマー（開拓使雇用の園芸専門家）がガーデンデザインした前庭が造られた。明治17年発行の北海道誌³⁹には、明

39 開拓使編『北海道誌（上）』（北海道誌巻之二，地理）



出所：北海道誌（明治 17 年）

図 2 豊平館と前庭

治 15 年の製図で豊平館（図 2）が描かれている。建物の入り口前の庭園は日本庭園とは全く異なるものであり、芝生の中に曲線の苑路がつくられ、池の側にはロックガーデンが造られている。

小寺⁴⁰は豊平館の庭園について「当時かくも旗色鮮明に“西洋式”造園の実施せられたことは、正に驚異に値する」と述べている。しがらみを持たない北海道であったからこそ、日本庭園を造らずして西洋庭園を造ることが可能であったと考えられる。

重要文化財である赤レンガの構築物である北海道庁の前庭も同様に西洋庭園であるし、また、戦前の 1938 年には、北大植物園に大雪山系トムラウシ山 8 合目の高山植物の植生に似せて、ロックガーデンが造られ、現在もその姿を留めている。因みに、2001 年にはその隣に北アメリカ大陸の自生種を植栽したカナディアン・ロックガーデンがオープンした。このように、官が率先して日本庭園とは異なる庭づくりを進めてきた風土を持つ北海道である。

4.2 北海道にマッチするガーデンの特徴

安藤⁴¹は庭園の様式は「時代、風土、哲学思想に応じて意識的、無意識的に選択されるものである」という。庭園が権力の象徴として位置づけられた歴史を有することは、洋の東西を問わず言えることであるが、そのカテゴリーから抜け出たのがコテージガーデンそしてイングリッシュ・ガーデンであることは前述した通りである。日本においてガーデンが 20 世紀末から 21 世紀の現在における庭園のひとつの形であると捉えれば、北海道にガーデンが花開い

ているのは、時代、地域住民性、風土によって意識的、無意識的に選択されていると考えることも可能であろう。

北海道には遠くから出かけて来てまでも見るべき日本庭園の数は非常に少ないが、それに反比例するかのようにガーデンは多い。その要因のひとつとして伝統がないゆえに新しい庭園文化の創造が可能であったということもできよう。この点はまさに、前述したイングリッシュ・ガーデンのキーワード・多様性と不規則性の容認である。日本庭園の文化が色濃く支配されている地域であるならば、庭についての創造性の自由度は、暗黙のうちに制限されていたかもしれない。

2012 年 6 月に北海道ガーデンショーが十勝千年の森で開催されたときに、ガーデンショーのプロデューサーであった高野が北海道は庭園文化を発信するだろうと述べたことは前述したが、それは東京のような都市型でもなく京都のような伝統的な形でもなく、他の地域には見られない北海道の大地の風景・デザインによって、また積み重ねた歴史や文化が少ない分、しがらみも少なく、良い部分があれば外国からでもどんどん取り入れて新しい庭園文化を創造できるからであるという。まさに北海道のガーデンは権力とは無関係、歴史の重みとは無関係な庭なのである。そしてそこには地域住民性・道民気質が一枚かんでいるということもできるのではないかと考える。

日本庭園の様式には、宗教・哲学思想を避けて通れないが、現代的な日本の、いや北海道のガーデンにそのような枠組みはないと思われる。ここでは道民気質、道民の価値観に置き換えて考えてみたい。前述したように、開拓当初から外国の文化を取り入れながら発展してきた北海道は、外からのものを比較的簡単に受け入れる生き方をしてきた。物事を見る目はあるにしてもブランドに弱く、イングリッシュ・ガーデンというブランドにも当然のごとく弱く、それを受け入れつつ、上手に北海道にフィットする形にアレンジしてきたといえることができる。上野ファーム（表 1 参照）の上野砂由紀は、はっきりとイングリッシュ・ガーデンではなく北海道ガーデンをつくるという。イングリッシュ・ガーデンは英国の気候風土、文化・伝統が息づくものであり、それゆえイングリッシュ・ガーデンをそのまま北海道

40 小寺駿吉「北海道における公園の発達とその社会的背景」北大農学部演習林研究報告, 21(2), 257-281 (1962)
札幌市教育委員会編『さっぽろ文庫 15, 豊平館・清華亭』p.288 (1980)

41 安藤 前掲書 p.4 (2011)

に移植すること等できない。あくまでもイングリッシュ・ガーデンのエッセンスを大事にしながら北海道ガーデン、つまり北の大地だから表現できる個性ある庭を造る⁴²のだと述べている。その根本にあるのは「わたしたちには新しもの好きのフロンティア精神があるのでしょう。失敗を怖れるより、オリジナルなものを作ろうという風土がある。……夢を育てるのに適した文化なのでしょう」⁴³と言っているが、これこそが北海道人氣質というものであると考ええる。

二点目の重要な要素は気候風土である。北海道は冷涼な気候であり、一面では花に向かない風土ではないかと捉えられがちであるが、実際はそうではない。ガーデンは地域に根差した郷土種の花々を植栽することが、コテッジガーデンからの基本であることは前述したが、北海道のガーデンにおいて宿根草がメインに植栽されていることは、決して花に向かない地域ではないことを示している。道外から1年草や2年草を毎年毎年移植してガーデンを作り上げているわけではない。様々な品種改良によって北海道に適するようになった花々も当然に存在するが、自生種を大事にしていることは指摘できる。例えば、クロユリやオオバナノエンレイソウ、ハマナシなどの自生種は、本州のガーデンを彩ることはほとんどないと思われるが、北海道のガーデンでは美しい花を咲かせ、群生しているガーデンさえ存在する。

冷涼な気候と開花時期との関係は、デメリットばかりではない。北海道ではいろんな花が一遍に咲く、とよく言われるが、そのことがかえってガーデンを豊かにし、色彩鮮やかにし、そして心躍らすものになっている。しかも花々は一斉に咲いて一斉に散るわけではなく、自然の摂理に従って行動していることが、見る者に伝わってくる力を持っている。

北海道では4月の終わりから開花時期が始まり11月中旬には見るべき花々は終わってしまい、後は雪に埋もれる、というのはおおそ事実である。しかし、紅葉が始まってもシクラメン(写真9-1)が咲き、地面から花だけが出てきたようなコルチカム(写真9-2)が咲き、小豆色と白色の小花をたくさん咲かせるアスター・ラデリフロス‘プリンス’ (写真9-3)も元気にしている。グラジオラスは北海道では夏の花であるが、ガーデナーの努力により9月末～10月初めでも赤・白・黄色などのグラジオラスの群生(写



写真 9-1 シクラメン



写真 9-2 コルチカム



写真 9-3 アスター・ラデリフロス‘プリンス’

写真 9 晩秋でもガーデンを彩る花々

真10) をガーデンの中で見ることができる。道外と言えども12月～2月に花が繁茂しているわけではなく、やはり季節的には花の寂しい時期である。むしろ北海道においては、積雪の時期があるからこそ、花々はゆっくりと休養をし栄養を蓄え、そしてストレスの少ないことが素晴らしい開花期を迎えることができると思うことができる。冷涼な気候は花の色を美しくし、開花期間を長引かせ、多くの宿根草を育てるのに適している。一方、道外、特に関東

42 上野砂由紀著『北の大地の夢みるガーデン』p.87, 集英社 (2009)

43 上野 前掲書 p.45 (2009)



写真 10 晩秋でもみられるグラジオラスの群生
(紫竹ガーデン・ボーダーガーデン)

以西では真夏に北海道のように花々が咲き誇ってはいない。一般に初夏までが花の見ごろなのである。真夏の暑さは花を傷め、ガーデンを寂しくしている。本州の 7 月・8 月はガーデンの入場者が少ないのはそのせいである。一方、北海道ではこの時期、素晴らしいガーデンが展開している。写真 11 は 7 月のガーデンの様子を写したものであり、花々がガーデンに、豊かに美しく繁茂していることがみてとれる。

暖かい地域では宿根草よりも 1 年草や 2 年草が花壇に植栽されることが多いが、北海道では宿根草がガーデンを彩ることが多く、その点でもガーデンの基本的要素を充足している地域である。そこで北海道ガーデン街道を形成する 8 か所のガーデンや道央圏のガーデン等が花の見ごろの情報(表 2 参照)を提供しているので、それに基づいて宿根草・多年草を 3 つ取り上げて開花時期を見ることにする。

道外では 2～3 月の早春の花である耐寒性のクリスマスローズは、北海道では 4 月～6 月の花であり、花期が長い花であるためにガーデンによっては 7 月でも見ることができる。北海道のガーデンの早春を彩る花は、スプリング・エフェメラルと言われるカタクリから始まると言えそうである。4 月末から 5 月初旬に紫がかったピンク色のカタクリの花が、青色のエゾエンゴサクや白色のニリン草とともに咲き、ガーデンを彩るが、道外ではカタクリは 3 月中旬から咲き 4 月の中頃にはほぼ終わり、宿根草のエゾエンゴサクはガーデンにはない。

花が寂しくなった冬を間近に控える北海道のガーデンでよくみられるのが、エキナケアやヘレニウムである。花の中心部が盛り上がり、花びらが下に垂れ下がる特徴ある姿をしている。道外では 6 月には咲く花であり比較的長い花期を有している。一方、北海道では 7 月から 8 月の花であるが、夏から秋、そして初冬でもガーデンに彩りを添える頼もしい花



写真 11-1 大雪森のガーデン・森の迎賓館



写真 11-2 十勝千年の森・メドウガーデン

写真 11 真夏のガーデン

である。

昨今の気候変動で必ずしも冷涼な気候とはいき切れなくなっているとはいえ、春夏秋冬がはっきりしている北海道である。冷涼な気候にもっともマッチするのが高山系の花々である。本州では高山に行かなければ見ることのできないチシマフウロやミヤマオダマキ、ハクサンチドリ、チングルマ、キンロバイなどの高山植物が平地のガーデンにごく一般的に植栽される。またガーデン愛好家にとっては、ぜひ見たいと思われる「ヒマラヤの青いケシ」が大雪森のガーデンやイコロの森には植栽されている。これも北海道のガーデンだから可能なのだろう。因みに札幌市にある国営滝野すずらん丘陵公園でもヒマラヤの青いケシを見ることができる。取り上げたのは、ほんの一例にしかすぎない。表 2 にガーデンを彩る花々の開花時期の一例を示した。

また、イングリッシュ・ガーデンと言えは多くの人の脳裏に浮かぶ花はバラであり、当然の如く北海道のガーデンをも彩る花である。北海道にはバラの花に特化したローズガーデンも存在し「秩父別のローズガーデン」「岩見沢公園のローズガーデン」は現在、特に有名であるが、かつては 2009 年に閉園した札幌の「ちぎきばら園」がバラの花園であった。

表2 花の開花時期

花の名称	北海道	道外(主に関東以西)	備考
カタクリ	5月上旬	3月下旬～4月	
クリスマスローズ	4月～7月	2月～3月	
キボウシ	5月～10月	6月～9月	
アルケミラモリス	6月～7月	5月～6月中	
芍薬	6月～7月	5月中～6月中	
クロッカス	5月～6月	2月初～3月上旬	
オオバナノエンレイソウ	4月～5月	—	北海道の自生種
エゾノリュウキンカ	4月～5月	—	〃
ブルンネラ	5月～6月	4月～5月	
ヒマラヤの青いケシ	6月	—	信州の高山に群生地有
ラッセルルピナス	5月～7月初	5月中～6月中	北海道では宿根草, 暖地域では1年草, 夏に休眠
レンゲつつじ	5月～6月	4月中～5月中	
クロユリ	6月～7月	—	北海道の自生種
カンパニュラ	6月～8月	5月～7月	
クリンソウ	6月～7月	5月～6月中	
ラムズイヤー	7月～8月	5月～7月	
デルフィニウム	6月～9月	4月末～6月初	
コスモス	7月～10月	7月～11月	
紫陽花	7月中～8月末	6月～7月中	
エリンジウム	7月～8月	6月～7月	
ルドベキア	7月～9月	6月下旬～10月	
ジギタリス	7月～8月	5月～7月	
ゲラニウム	7月～10月	4月末～6月	
ヘメロカリス	7月～8月	6月中～7月	
エゾリンドウ	8月～9月	8月下旬～10月	道外：笹リンドウ
ホトトギス	9月～10月	9月～10月	
トリカブト	9月～10月	8月～10月	

(注) 天候によって開花は変化するので絶対ではない。

出所：表1に示すガーデンのパンフレット、『ようこそ北のガーデニング』（北海道新聞社刊，2001），
大阪府立花の文化園植物図鑑 web，講談社編『だれでも花の名前がわかる本』等

バラは品種改良が行われて2万種以上の品種が存在すると言われるが、花卉が小さく愛らしい原種や一季咲きで一般に芳香が強いオールドローズや大輪で色も鮮やかなハイブリットローズ、そして食用のローズなどがあり、ガーデンを長く彩る花である。北海道のガーデンでも11月に訪ねてもその姿を見ることができる。

北海道のガーデンは自然とともにあることによって、花卉中心とはいえ、コニファーガーデンやグラスガーデンを持つところも多く、それゆえ樹木の紅葉や花のない時期でもガーデンを美しくさせる特徴を持つ（写真12）。

このように北海道のガーデンには、雪で覆われないうえ、いつでも何らかの植物をガーデンにみることが可能であり、冷涼な気候は花に向かないという常識が覆されるところである。

三点目は現代社会との関係である。実際そうであるかどうかは別にして、20世紀の終わりから女性の



写真12 グラスガーデンと紅葉のコラボ

時代と社会では言われるようになった。女性がガーデンに大に関係しているのである。ガーデンは草花や樹木が主役であるが、植物に対する好みには性差が関係するという。ターゲットは「男性はどちらかといえば永続性のあるものを好み、（庭には）樹木と灌木を植える。……女性が庭づくりをするとな

ると花は欠かせない。1 世紀半もの間 (1600 年代から 1700 年代前半)、男性が造園に情熱を注いでいたときは、花は庭園から姿を消していた⁴⁴ という。日本庭園の作庭者のほとんどが、最近まで男性であることは、それを如実に物語っている。富良野市の「風のガーデン」の作庭に関わった脚本家の倉本聡も戦時中の記憶からターギットが述べたことと同じことを話している。木は好きであるが、花は短命であるというイメージがあって、美しいほど虚しい感じがするので好きではなかったと⁴⁵。しかし、上野ファームのガーデンづくりに関係して花を見る目が変わったという。

そもそもイングリッシュ・ガーデンの立役者は女性のガートルード・ジーキルであり、彼女が考えたガーデン・デザインの基本が、今も生き続けてガーデンは発展を続けているのである。このように見えてくると、ガーデンは女性の時代を映すものと位置付けることが可能でもあろう。そこで、北海道のガーデンをみると、実に多くの女性たちの活躍があって花開いているといえる。紫竹ガーデンの紫竹昭葉、上野ファームの上野砂由紀、銀河庭園の庄司トモ子、バニー・ギネス、十勝千年の森の新谷みどり、恵庭のオープンガーデンに関わった内倉真由美などが挙げられよう。大雪森のガーデンや風のガーデンのガーデンデザインにも上野砂由紀が関係している。もちろん上記の人たちだけではないことは言うまでもない。ガーデンは決して権威を象徴するものではなく、市井の人たちの価値観や感性に基づくものである。

まとめ

最近出版された本のタイトルに『世界は解らないことだらけ、なので調べてみた』というのがある。本稿は『ガーデンについて解らないことが多すぎる。なので調べてみました』ということになるだろうか。ガーデンは単に花畑や花壇をたくさん集めたものではないこと、定まった様式・ルールがあるわけではないが、自然風であること、植物、特に宿根草が自然のように繁茂するところであり、地域に根差し、郷土種が大切にされる花卉中心の庭であり、ポタジェを有することもある。そして北海道を除くと一般には大きな面積を有していない庭である。

北海道は新しい庭園文化、つまりガーデン文化を発信できる場所だという考えについて、時代、気

候風土、地域住民性という点から検討した。ガーデンが北海道において発展しているのは、上記の 3 点がプラスに働いている結果であることが推察された。

北海道のガーデンは、コテッジガーデン、イングリッシュ・ガーデンの概念の流れのなかにありながら広い面積を持つ特徴がある。北にあって広大な土地に作庭されたガーデンは北にしか見られない要素を持ち、他の地域では決して作庭できない北海道のガーデンである。そこでその観光価値及び観光マーケティングについて第 2 報で検討する。

注

(注 1) 681 か所の庭園の中に北海道の庭園が 11 か所含まれる。八雲町にある梅村庭園は町指定の重要文化財であり、北海道では数少ない池泉回遊式庭園である。また函館市の最古の寺院・高龍寺の庭園や紫陽花が有名な小樽市の旧青山家別邸庭園など 11 か所のうち 10 か所は日本庭園である。道庁赤れんが前庭だけが西洋庭園である。これら 11 か所の庭には水があり石があり、花も咲き当該地域の風土的特色を示す庭園ではあるが、いずれも旅行ガイドブックなどで北海道のガーデンとして紹介されてはいない。

(注 2) 浜名湖湖畔で行われた「静岡国際園芸博覧会 ― 花・緑・水～新たな暮らしの創造 ―」は 2004 年 4 月 8 日から 10 月 11 日までの 187 日間行われ、5,447,788 人の入場者があった。

(注 3) ジーキルの際立つ功績のひとつが、ボーダーガーデンの美しさである。花の色の組み合わせにおいて、たとえば白や中間色の花、同じ青でも微妙に色合いの異なる青を隣同士に置いたり、ボーダーの中心に向かって黄色、オレンジ、赤の花を置いたりすることによって微妙な色合いが生まれるガーデンとなる。また、ボーダーガーデンの花が次々と咲いていくように花を組み合わせたり、背後に向かって花の丈が高くなるように植栽する。

(注 4) アースガーデンはイギリスの庭園デザイナー・ダン・ピアソンがデザインしたものであり、2012 年英国ガーデンデザイナーズ協会賞選考で、最高位の大賞を受賞した。

44 ガブリエル・ターギット著・遠山茂樹訳『花と造園の文化事典』p.185, 八坂書房 (2014)

45 上野砂由紀著『ガーデン花図鑑』p.92, (株)日本インテグレート (2014)

〈参考文献〉

- 赤川裕著『英国ガーデン物語 ― 庭園のエコロジー』
研究社出版 (1997)
- 岩切正介著『英国の庭園 ― その歴史と様式を訪ね
て』法政大学出版局 (2004)
- 岩切正介著『ヨーロッパの庭園 ― 美の楽園をめぐ
る旅』中公新書 1934, 中央公論新社 (2008)
- 橘セツ「庭園をめぐるライフヒストリー／ライフジ
オグラフィ―」神戸山手大学紀要 第8号, 89-104
(2006)
- 中山理著『イギリス庭園の文化史 ― 夢の楽園と癒
しの庭園』大修館書店 (2003)
- 西村保五郎著『北海道の庭園』ミニコミセンター
(1979)
- 西村保五郎著『北海道の庭園』ミニコミセンター
(1981)
- 村岡香奈子「明治期の庭園におけるイギリス風景庭
園の影響」日本庭園学会誌 25, 31-39 (2011)
- 吉川朗子「コウルリッジのコテージ・ガーデン」神
戸大論叢 61(4), 129-147 (2010)

(みつたけ みゆき 名誉教授)